



『愛知大学史研究』の創刊と発行について

大学史事務室 佃隆一郎

現在愛知大学東亜同文書院大学記念センターでは、本『オープン・リサーチ・センター年報』と交互に出す形で、「大学史事務室」の紀要としての『愛知大学史研究』も2007年より各年10月に刊行している。これは、愛知大学創立50周年の時期に設けられていた「50年史編纂委員会」によって、『愛知大学五十年史』編集（2000年通史編刊行）と並行して1994年より2001年まで計4回発行した『愛知大学史紀要』の復活としての面もあるが、単なる再刊ではない。その点について、『…五十年史』の中心執筆者であり、今回『愛知大学史研究』編集の中心を担うことになった大島隆雄名誉教授・東亜同文書院大学記念センター客員研究員は、創刊号（「2007年度版」を付記）の冒頭でこう述べている。

編纂委員会も解散され、すでに5年以上の歳月が流れたが、ここに（…）プロジェクト（注、文部科学省のオープン・リサーチ・センター整備事業）の一環として、前身校、東亜同文書院大学とその発展形態としての、後進校、愛知大学という新たな視点で、大学史を研究することが要請されるに至った。新たな視点とは、『五十年史』の段階では、東亜同文書院大学を前身校として位置づけようとする、問題提起はなされていたが、同校についての研究がまだ十分には進捗していなかったため、その継承関係は明確にされないまま終わっていたからである。

したがって、今回発行する『愛知大学史研

究』は、そこに焦点をあてた研究誌であり、そのため読者には本誌は、かつての『愛知大学史紀要』の続編であるとともに、その新たな展開の姿であると理解していただきたい。

（iii頁）

このように、改めて世に問うことになった『愛知大学史研究』は、新たに“東亜同文書院（大学）との関連”を前面に据えた編集方針をとることになり、さらに「同文書院-愛知大学という狭い視野に縛られ、いわばひとりよがりの自校中心主義の陥穽に陥らないようにするため」（大島氏、同頁）、創刊号は「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」と副題を付した特集号として編集、刊行した。巻頭に掲載した酒井吉榮名誉教授の論文「世界大学史と愛知大学」と、100頁以上を割いて収録した2007年3月10日愛知大学豊橋校舎で開催の（副題と同名の）公開シンポジウム記録は、その2大重点としてのものであった（後者は2006年度秋学期より開設されたりレー講義「総合科目 大学史」の各担当者-大島氏や私を含む-によるものであり、この講義は“東亜同文書院や愛知大学の歴史”のみならず、欧米や日本における大学全体の歴史をも包含している）。

創刊号の全体の構成（目次）は以下の通りである。

巻頭言 ごあいさつ（藤田佳久）

『愛知大学史研究』の創刊にあたって（大島）



論文 世界大学史と愛知大学 (酒井)
シンポジウム「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」

新科目「大学史」とシンポジウム「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」について (佃)

〔報告の部〕

中世ヨーロッパにおける大学の起源

(北嶋繁雄)

近代大学の誕生 (海老澤善一)

「日本における大学の形成」と

「戦後の学制改革」 (太田明)

旧制大学の歩み (大島)

“本学の前身” 東亜同文書院大学 (小崎昌業)

愛大事件 (1952年5月7日) (豊島忠)

山岳部「薬師岳遭難」 (山田義郎)

創立六十周年に当たって

—創立時の諸事情と現在— (武田信照)

「大学史」講義 まとめとして (佃)

〔討論の部〕 (大島ほか計15名)

講演 愛知大学の創立者 本間喜一

—法学者としての軌跡— (石井吉也)

史料紹介 日中国交回復期の愛知大学と中国との

「新証言」—穂積七郎代議士追悼文ほかより— (佃)

資料目録 本間喜一関係資料

活動報告、編集後記

続く2008年10月刊行の第2号(「2008年度版」)も、「東亜同文書院と愛知大学」の特集号と位置づけた。「大学史」講義の構成・担当者が一部変更されたこともあり、創刊号と同様の観点から、同講義変更分の報告および酒井氏の(前号の論文に関連した)講演を収録したほか、新たな「狙いの一つ」として、「同文書院大学から愛知大学への発展を理解するために(…)アジア・太平洋戦争期における書院大学末期の変容と、その中で形成される『止揚の諸契機』を解明するこ

と」と「愛知大学草創期がどのような状態であったかを具体的に明らかにしておくこと」(いずれも大島氏、同号ii頁)を掲げ、大島氏の論文をはじめ各氏の講演・書評・史料紹介の収録で意図することにした。また、「五十年史」編纂時に整理していた、本間喜一第2・4代学長および小岩井浄第3代学長の関連資料(両氏とも元東亜同文書院大学教授一本間氏は同校最後の学長一。小岩井氏の資料は夫人の多嘉子氏のものを含む)の目録掲載を完了させることができた。

第2号の全体の構成は以下の通りである。

巻頭言 ごあいさつ (藤田)

『愛知大学史研究』第2号の刊行にあたって (大島)

論文 アジア・太平洋戦争下における

東亜同文書院の変容

—いわゆる「評価問題」と

「止揚の諸契機」に着目して— (大島)

講義報告

2年度目の「大学史」リレー講義について (佃)

ドイツにおける近代的大学の成立

—ベルリン大学をめぐって— (河野眞)

アメリカにおける近代大学の展開 (太田)

愛知大学キャンパスツアー (佃)

戦後の学制改革 (田子健)

まとめとして (黒柳孝夫)

講演 世界大学史と愛知大学 (酒井)

愛知大学創成期から

もう1つの原点を考察する

—それを生かせるかどうか

〔写真と資料で読む〕— (越知専)

史料 愛知大学文学部文学科設置認可申請書

書評 愛知大学同窓会創立55周年記念誌

『学生たちの証言で綴る創成期の愛知大学』

について (長谷川哲男)

資料目録 本間喜一関連資料 (続)

小岩井浄・多嘉子関係資料
活動報告・編集後記

現在（2009年3月）のところ、刊行を果たした『愛知大学史研究』はこれら2冊にとどまっているが、来るべき第3号に収録する予定のものはすでに長編の論文が1編用意されていて、論文中心の構成にする計画である。いっぽう、オープン・リサーチ・センターの事業としての講演会・研究会も定期的で開催していることから、それらの記録も（センター年報との兼ね合いを考慮しつつ）収録を続けていきたいところであり、また愛知大学草創期の史料についても、活字化して紹介すべきものがこれからさらに現れてきそうである（例

えば文部省への申請書類では、1950年代の未発表のものが数点残っている）。

各地の各大学でも、『大学史』の編纂や関連資料室の整備に呼応する形で、『紀要』の編集、刊行が続々と行なわれていて、中には論文・資料・その目録などといったジャンル別に分けて刊行する動きもあるようである。本『愛知大学史研究』が、そうした各分野において充実した内容となり、さらなる分化と発展に至るまでにはまだ相当の努力と歳月を要することであろうが、十数年後に訪れるであろう“次の愛知大学史編纂の時機”にそのいしずえとなりうるよう、着実に不断の刊行作業を続けていかなければなるまい。

愛知大学東亜同文書院大学記念センター
オープン・リサーチ・センター



愛知大学史研究

THE JOURNAL OF THE HISTORY OF AICHI UNIVERSITY



《特集》

世界と日本の大学史の流れの中での
東亜同文書院と愛知大学

2007年度版

創刊号

愛知大学
AICHI University